

今回は前号の「肝がん」からの続きで、その治療法です

代表的な肝がんの治療法

肝細胞がんの治療法の代表的なものは、肝切除術、肝動脈化学塞栓治療、穿刺治療ですが、他の臓器のがんと違い、慢性肝炎や肝硬変により、がんが発生した肝臓自体の働きが極端に悪くなっていることが多く、肝臓にあまり負担をかける治療はできないという制限があります。がんに対する治療が全くできないほど肝臓が痛んでいる方もいます。

最も確実な方法は、がんを含めて肝臓の一部を切除してしまうことですが、肝切除術がもっとも肝臓に負担をかける治療法であり、肝臓の力が不足していると、術後に「肝不全」(肝臓の働きが不足し、生命を維持できない状態)となり、手術は成功しても、手術から回復できない場合もあります。したがって、肝切除をする場合は、術前に肝臓の余力がどの程度あるか十分に検討しなければなりません。

穿刺治療と肝動脈化学塞栓治療

最近注目を浴びているのが穿刺治療です。肝臓に細い針を刺し「ラジオ波」という特殊

な電磁波を流して肝がんを灼くのです。

肝臓に対する負担は軽いのですが、灼ける大きさに限界があり、また、肝がんは一度に複数箇所と同時に多数発生することも多いので、肝がんの大きさや数で適応が決められます。少数の小さな肝がんには有効な治療法です。

肝動脈化学塞栓治療という治療法は“兵糧攻め”と喩えられ、肝がんに栄養を運んでいる動脈にカテーテルを挿入し、カテーテルから動脈を閉塞させるような物質や抗がん剤を注入し、肝がんに栄養が行かないようにすることでがん細胞の死滅をねらった治療法です。がんを100%死滅させることは困難な場合が多いのですが、数カ月ごとに繰り返すことにより一定の効果は得られます。

副作用の少ない飲み薬も登場

肝細胞がん発生を予防する最近のトピックスとしては、副作用が強く使用できる患者さんが限定されていたインターフェロンという注射薬とは違う、副作用の少ない飲み薬でC型肝炎ウイルスを駆逐する治療法が高い奏効率(がんがどれだけ縮小したか)を示し、C型慢性肝炎から肝硬変への移行や、肝細胞がん発生の抑制ができるようになったことです。